

「しんしょく」の漢字についての提言

著者	藤村 郁雄
雑誌名	静岡地学
巻	46
ページ	34-38
発行年	1982-11-14
出版者	静岡県地学会
URL	http://doi.org/10.14945/00025554

「しんしょく」の漢字についての提言

藤村 郁雄*

山肌が水や風によって削られ崩される現象に侵蝕又は浸蝕の二様の漢字があてられているが、私はこれを蝕開と称ぶことを提言する。

理由： 侵蝕は本来他の領土へくいこむ意であり、一方浸蝕は多分に水による腐蝕のたぐいに解されるからである。蝕開の現象は所詮地表の準平原化を指向すると理解する立場から、侵(オカス)、浸(ヒタス)よりも開を用いる方が適しているのではないかと思うことも理由の一つである。

いま、蝕開を生ずる営力に蝕をあて、主な蝕名及びその作用と蝕の総称を示せば次のようになる。

蝕の名	作用 (はたらき)	総 称
海 蝕	海がむしばむ	} 蝕 開 ここには従来用いられていない崩蝕をあげたが、これは斜面の下方に蝕開が起これば上方が崩落することを重視したものである。各蝕が相互に共働することのあるのはいうまでもなく、或いはこれを共働しているのが通例であるといってもよい。
河 蝕	沢・川・河がむしばむ	
水 蝕	水河がむしばむ	
溶 蝕	水の化学的営力による	
風 蝕	風力による	
崩 蝕	重力による	

参考のため、提言に使用した資料を次に示す。

資料 I 最近の辞書・字典類

(1) 地学事典 (平凡社) (昭・56)

しんしょく 侵 食：(英) Erosion. (他の外国語略)、地球の表面が雨・流水・風・波・雪・水河などの外因的営力で削られる作用。(以下略)。()印は藤村。

(2) 文部省用字用語例(文部省) (昭・56)《常用漢字表制定後》、「表外漢字が語の一部となっている場合の書き表し方」の中)

見出し	▲印は表外漢字	書き表し方	備 考
しんしょく	侵 ▲蝕	侵 食	領土を侵食する (中略) 特別な漢字使用などを必要とする場合は表外漢字を使用しても差支ない。(後略)
しんしょく	浸 ▲蝕	浸 食	海岸が浸食される

(3) 学術用語集—地理学— (文部省) (日本学術振興会編) (昭・56)

Sinsyoku : 侵 食。——作用：Sinsyoku sayo：侵食作用。

(4) 地理学辞典 (二宮書店) (日本地誌研究所) (昭・56)

侵食作用：動的な外的営力が地殻の構成物質を獲得したり奪い去る作用。(以下略)

*駿東郡長泉町下土狩 931—4

(5) 広辞苑 (岩波書店) (新村 出) (昭・55)

しんしょく〔侵蝕・侵食・浸蝕〕：① おかしそこなうこと。② 流水・氷河・風などが山を削る作用。——こく〔侵食谷〕《略》。——さよう〔侵食作用〕侵食に同じ。《以下略》

(6) 最新地理学辞典 (大明堂) (藤岡謙二郎) (昭・54)

しんしょく 浸食 Erosion：土地を削り岩くずを運び去る作用によって地表を低下させる作用をいう。《以下略》

(7) 大漢和字典 (大修館) (諸橋轍次) (昭・51)

侵蝕しんしょく：おかしはむ。虫が木の葉をくい尽すように、次第次第に敵国にくだむ。
浸蝕しんしょく：水の漸次におかしそこなうこと。

以上を通観すると、先ず蝕開に侵食・浸食の二種が使用されていること、次に侵食は領土をおかすとし、浸食は水による蝕開としているもの、更には侵食(蝕) 浸食(蝕)の双方が同様のものとして使われるが、その意味には、① おかしそこなうこと、② 蝕開の二種があり、その何れを採るかは文章の中味により選ぶと解されるものなど、種々様々である。これが現状である。

資料 II 従来の辞書・字典類

(8) 玉編字引 (西野古海) (明・8)

侵(シン)：ススム、ヤブル、オカス、ケヅル。浸(シン)：ウルホフ、ヤハラグ、ヒタス、アマネシ。蝕(シヨク)：ムシクフ、ヤブル。侵蝕(シンシヨク)：オヒオヒトリコム。《浸蝕なし》

⑨ 歴史文章字引 (東京・萬蘊堂) (原田由己) (明・12)

侵(シン)：オカス、ススム、ヤブル。浸(シン)：ツケル、ヒタス、ススム、シズムル、ヤヤ、ヤウヤク、サハ。蝕(シヨク)：ムシバム、ヤブルル。侵蝕(シンシヨク) クヒトル。《浸蝕なし》

(10) 言泉 (大倉書店) (落合直文・芳賀弥一) (昭・3)

しんしょく 侵蝕：漸次におかしそこなう。

しんしょく 浸蝕：〔地〕(英) Erosion。漸次に水の浸みこみておかしそこなうこと。水蝕。

(11) 広辞林 (三省堂) (金沢庄三郎) (昭・9)

しんしょく 侵蝕：おかしそこなう。

しんしょく 浸蝕：水又は水流の浸み入りて次第に地殻・岩石をそこないかくこと。《以下略》

(12) 言苑 (博文館) (新村 出) (昭・19)

しんしょく 侵蝕：(一) 次第に敵国にくだむこと。(二) 河流・海水・流水・風力などの作用で地球表面の磨り削られること。《(二)は蝕開》

しんしょく 浸蝕：水の浸みこんで物をそこなうこと。——さよう浸蝕作用。〔地〕地球表面の河流・海水・流水・風水などで磨り削られる作用。《水による蝕解》

- (13) 大辞典 (平凡社) (下中弥三郎) (昭・28)
 シンシヨク 侵 蝕：流水・風力・流水・海水等の外的営力により地球表面が削取され荒廃する現象。 (蝕開)
 シンシヨク 浸 蝕：氷雪・水のため地殻が溶けておかされること。(水による蝕開)
- (14) 辞海 (三省堂出版部) (金田一京助) (昭・28)
 しんしよく 侵 蝕：次第におかしむしばむ。
 しんしよく 浸 蝕・侵 蝕：雨水・河水・氷河・風・海波等の外力によって地表が次第に削られていくこと。——谷：浸蝕作用によって出来た谷。 (侵蝕・浸蝕ともに蝕開)
- (15) 字源 (角川書店) (簡野道明) (昭・30)
 侵 蝕 しんしよく：おかしはむ。次第に敵国にくいこむ。=蚕蝕。 (浸蝕なし、(8)(9)と同様)
- (16) 広辞苑 (岩波書店) (新村 出) (昭・30)
 しんしよく [侵蝕]：おかしそこなうこと。
 しんしよく [浸蝕]：流水が地盤を掘り削って溝や谷を生じ山を崩す作用。流水の破壊作用。
 ——こく [浸蝕谷] (略)。——さよう [浸蝕作用] 浸蝕に同じ。——さん [浸蝕山] (以下略)
 たに [谷・谿・溪] (中略) 更に侵蝕谷は (以下略)。(侵蝕谷・浸蝕谷の二様出ている)
- (17) 新字源 (角川書店) (小川環樹ほか) (昭・48)
 侵 蝕 しんしよく：おかしはむ。虫が《中略》のように次第に敵国にくいこむ。
 浸 蝕 しんしよく：水が次第に浸みこんで岩や土などを崩す。
- (18) 大言海 (富山房) (大槻文彦) (昭・49)
 しんしよく 侵 蝕：オカシムシバムコト。オカシソコナフコト=蚕蝕。
 しんしよく 浸 蝕：水ノ次第ニ浸ミコミテムシクヒソコナフコト。水ノ浸蝕ニヨリテ——作用。
- (19) 国語大辞典 (小学館) (日本大辞典刊行会) (昭・49)
 しんしよく 侵 蝕 (蝕)：他を次第におかしそこなうこと。
 しんしよく 浸 蝕 (蝕)：水・風などが岩や土を磨り減らしたり崩したりすること。(蝕開)
- (20) (岩波) 国語辞典 (岩波書店) (岩淵悦太郎・水谷静夫) (昭・54)
 しんしよく ① [侵蝕 (蝕)]：次第におかしていってくいこむこと。② [浸蝕 (蝕)]：
 雨水・流水などの) 水が浸みこんで物をそこなうこと。
- (21) (学研) 国語大辞典 (学習研究社) (金田一春彦・池田弥三郎) (昭・56)
 しんしよく [侵蝕 (蝕)]：(虫がくっていくように) 他の領域を《略》おかしそこなうこと。
 しんしよく [浸蝕 (蝕)]：① 水が浸みこんで物をそこなうこと。② [地] 流水・海水・
 雨水・氷河・風などが陸地や岩石を少しずつ崩していくこと。又②は侵蝕と書くことも多い。
- (22) 新明解国語辞典 (三省堂) (見坊豪紀ほか) (昭・56)
 しんしよく 侵 蝕 (蝕)：他人の物 (領地) をおかし食いこむこと。

しんしょく 浸食(蝕)：(一) 水が浸みこんで次第に底を崩したり、腐らせたりすること。
(二) 風・水などの力により陸地が磨り減らされること。(二)——作用：(侵食とも書く)。(《侵食・浸食とも蝕開》)

以上を通観すると、明治の早い頃には字引に侵蝕(領土蚕蝕の意)はあっても浸蝕はなかった。昭和に入って間もなく浸蝕が見られ、大半が侵蝕を従来通り領土蚕蝕とし、浸蝕は水による蝕開としている。その中で蝕開に侵蝕をあてているもの、及び浸蝕をあてているものが数点ずつ見られる。又浸蝕が腐蝕を意味するように述べているのが数点ある。近頃になって侵食・浸食の別なく共に蝕開にあたると説いている辞書が一、二出て来ている。

資料 III 著書・文献類 (但し蝕開にあててある漢字だけを示す。)

1. 箱根・熱海両火山地質調査報文(震災予防調査会報告第16号)(平林 武)(明・29) 及び富士・愛鷹火山地質調査報文(同上報告第24号)(平林 武)(明・30) 侵蝕。
2. 日本風景論 (博文館)(志賀重昂)(明・38) 浸蝕。
3. 日本山水論 (隆文館)(小島烏水)(明・38) 浸蝕。
4. 陸文学講話 (早稲田大学出版部)(横山又次郎)(大・15) 浸蝕
5. 富士山の地理と地質 (古今書院)(浅間神社編・富士山の研究V)(石原初太郎)(昭・3) 侵蝕。
6. 新考地形学 (古今書院)(辻村太郎)(昭・5) 侵蝕。
7. 地理学講座 (地人書館)(執筆は各科目毎に担当者)(昭・6) 侵蝕及び浸蝕。
8. 地形図学概論 (三一書房)(高木菊三郎)(昭・18) 浸蝕。
9. 火山及び火山岩 (岩波全書)(久野 久)(昭・35) 侵蝕。
10. 山のなりたち (「山のなりたち」の中、山と溪谷社)(徳久球雄)(昭・44) 浸蝕。
11. 富士山の地形地質 (富士山総合学術調査報告書の中、富士急行KK)(津屋弘達)(昭・45) 侵蝕。
12. 北海道の火山 (「北海道の自然」の中、北海道自然保護協会)(石川俊夫)(昭・57) 侵蝕。
13. 日本の山地地形の研究 (日本学術振興会)(岡山俊雄)(昭・57) 浸食。

以上、これを通観するとき、蝕開現象に対し明治このかた著者により或いは侵蝕、或いは浸蝕が使用されて現在に至っていることを知られるであろう。

資料 IV 英和及び和英辞典の例

(a) コンサイス英和辞典 (三省堂)(大・12)

Erosion：侵蝕、腐蝕、潰蝕、水蝕作用、潰瘍。

(b) 英和大辞典 (三省堂)(昭・5)

Erosion：(一) 食込、蝕潰、蝕(ト)蝕(シミ)、腐蝕、浸蝕、水蝕、削磨(水又風ノ作用デ岩石ノ削減スルコト)。(二) 潰瘍、靡爛。～mountain 浸蝕山。～valley 浸蝕谷。

(c) 齊藤和英大辞典 (日英社)(齊藤和三郎)(昭・6)

Sinsyoku 浸蝕：Erosion Suru : toerode。川が浸蝕して深くなる the river wears channel deeper。

以上を通観すると、英語の辞典類に浸蝕の語が取り上げられたのは大正末期から昭和のはじめ頃のようなのである。和英辞典で蝕開に wears を使い、erode を使わないということから、私には蝕開現象が、即 Erosion ではなく、それに in geography とでも付加したものとすることを示唆しているように思われる。このことはまた、漢字採用の場合でも、先ず専門分野で統一された定義を与えそれを辞書字典類出版者に明示しておくことの必要を連想させられる。

終 り に

私は蝕開を提言したが、若し他に適当な語があれば、それを用いることこの上ない幸と思っている。何卒読者諸賢のご示教下さるよう御願ひ致します。

本稿を草するに当たり、長泉町民図書館長小野 要氏及び富士山測候所長志崎大策氏には資料の利用について大いに便宜をお計らい頂いたことを記し御好意を深く感謝申し上げます。